Glosas Emilianenses 研究II

太　田　強　正

Tsuyomasa OTA

この「Glosas Emilianenses 研究II」は、「Glosas Emilianenses 研究Ⅰ」の続編である。

Glosas Emilianenses は970～980年の作といわれ、内容は宗教的なもので当時のラテン語で書かれているが、難しいと思われる語句には、注解(glosas)が俗語で、つまり黎明期のスペイン語で付けられている。これが所謂 Glosas Emilianenses で、スペイン語の最古の記録である。

この小論においては引き続き、Menéndez Pidal の Orígenes del Españolの巻頭にあるテキストを用い、黎明期のスペイン語を音韻、語形、文法の面から眺めることにする。これに際して、glosas だけではなく、ラテン語の地の文章にも注目していきたい。なぜなら、ここに書かれているラテン語は中世ラテン語であるが、あまり教養のない人によって書かれたと思われ、俗語（つまり当時の話し言葉であった黎明期のスペイン語）の反映と思われる誤りが多数見られるからである。

これらを指摘・考察するために、ここでは各文章に番号を付けた。その代り、テキストの glosas に付けられている番号は省いた。

その他、テキストにあって、歴史言語学的考察には不要と思われる記号はすべて省いた。文字（s）も現代風に改めた。

テキストの〔　〕内が所謂 glosas であるが、これは元は、ページの隅や行間に書かれたものである。訳文中の（　）は筆者の判断で、訳文を補うために付けたもので、〔　〕とは無関係である。

Incipiunt sermones cotidiani beati Agustini

福者アグスティーヌスの日々の説教が始まる。

Agustini：正しくは Augustini であろう。Augustus>Agustus は disimilación である[注1]。

III－1 Gaudeamus fratres karissimi et Deo gratias agimus, quia uos, secundum desideria nostra, jncolumes〔sanos et salbos〕jnueniri meruimur〔jzioqui dugu〕.

親愛なる兄弟たちよ、我々は喜ぼう。そして我々は神に感謝します。なぜなら君たちが、我々の望み通りに無傷で見つけられることができたのだから。

jncolumes：正しくは incolumes である。半母音を表わす j が母音に用いられている。

〔sanos et salbos〕：現代スペイン語の sanos y salvos(無事に)で、前の jncolumes(incolumes)を説明している。

etはラテン語がそのまま用いられている。

salbosにおいてはｂとｖが混同されている。この混同は、ラテン語のｕとｖ(つづりの上ではｕとｖは自由に交代し、発音上でも両方とも単独では〔u〕、他の母音を伴う場合は〔w〕と発音されていた)が、時代が下がって４世紀ごろになると、唇の丸まりが失われて〔b〕に極めて近く、正確には〔b̞〕と発音されるようになったことに起因する。

このｂとｖの混同は、ラテン語の未来形消失の原因の一つである(注2)。

〔jzioqui dugu〕：バスク語で、“hemos encendido”（我々は火をつけた)と解されるが、この語句が説明していると思われるmeruimurとは適合しない(注3)。

Ⅲ－２ Et uere fratres juste et merito〔mondamientre〕pater gaudet quotiens filios suos et corpore sanos et Deo deuotos〔promissiones〕jnuenerit;

まことに父は、自分の息子たちが体が丈夫で信心深いとわかった時と同じくらい何度も兄弟たちのことを大いに喜ぶ。

〔mondamientre〕：前のjuste et meritoを説明しており、現代スペイン語に直訳すればmondamenteである。ここでは「正当に」の意であろう。

-mientre(古語には-mienteという形もある)のieは、ラテン語の強勢母音ĕから出ているので二重母音化しているが、現代スペイン語ではcultismoの-menteが使われている。-mientreの r はepéntesisである。

なお、Glosas Silensesにはmunda mientreという形が見られる(注4)。

〔promissiones〕：ラテン語で「約束」、「誓願」の意。前のdeuotos(中世ラテン語で「信心深い」を意味する形容詞)を説明していると思われるが意味的に一致しない。deuotosを名詞と解釈したのであろうか。deuotosに近い名詞としては中世ラテン語にdevotum(誓約)がある。

jnuenerit:正しくはinuenerit である。（Ⅲ－１参照）

Ⅲ－３ . . . oncessit〔donauit〕;

(彼は)与えた。

主語、目的語とも不明である。

〔donauit〕：concessitを説明しているラテン語で意味はやはり「(彼は)与えた」。

Ⅲ－４ hoc quod ad profectum animarum uestrarum pertinet〔conuienet fere〕deuemus caritati〔miente〕uestre suggerere〔seruire〕.

我々は君たちの魂の成長に関することを君たちの愛(の完成)に向けるべきであると思う。

「魂を成長させ愛を完成すべきである」の意か。

〔conuienet fere〕

conuienet：ラテン語のconvĕnit(<convenire)から出た形で、ĕ>ieの規則的変化をしているが語末のtは保っている。現代スペイン語のconviene(<convenir)である。

fere：ラテン語のfacereから出た形で、現代スペイン語のhacerである。この形はGlosas Silensesにも見られる[注5]。

conuienet fereで、現代スペイン語に直訳するとconviene hacer(～するのが適当である)となる。古スペイン語のconvenirには色々の意味があるが、このconuienet fereは前のpertinetの説明としては問題があるように思われる。

deuemus：正しくはdebemusである。bとv(u)の混同についてはIII－1参照。

caritati：caritasは、中世ラテン語でagapeの意がある。(Du Cange, Glossarium Mediae et Infimae Latinitatis参照) ここでは「愛」と訳した。

〔miente〕：ラテン語のmens(精神)の対格mĕntemから出た語である。語末のmを失い、強勢母音がĕ>e>ieの規則的変化をしている。現代スペイン語ではcultismoのmenteが使われている。(III－2参照)

この語は前のcaritatiを説明していると思われるが、意味がやや異なるのではないだろうか。

uestre：uestraeのaeがeに縮約された形である。

〔seruire〕：前のsuggerereを説明しており、「役に立つ」の意であるが、前後関係からすると「役だてる」であろうか。

III－5 Intelligite〔jntellegentja abete〕karissimi, quia non jdeo christiani facti sumus ut dejsta uita tantum solliciti simus〔ansiosusegamus〕...

親愛なる者たちよ、我々がキリスト者となったのは、我々がただこの世の命を気づかうためだけではないということを理解しなさい。

Intelligite：正しくはIntellegiteである。

〔jntellegentja abete〕

jntellegentja：正しくはintellegentiaである。「理解」の意。abeteの目的語になっているが、対格の語尾子音mを失っている。iとjの混同についてはIII－1参照。

abete：ラテン語のhabereの二人称複数に対する命令形habeteから出た形である。「君たち持て」の意。二人称複数に対する命令形の語尾(-te)は保たれているが、語頭のhが失われている。hはTiberius(存位AD14～37)の時代には、すでに発音されていなかった[注6]。

jntellegentja abeteで前のIntelligiteを説明しており、「君たち理解を持ちなさい（理解しなさい）」の意。ラテン語とスペイン語の中間的な語句である。

quia：「～ということを」を意味する接続詞。名詞節を導く接続詞quodが、原因を示す場合にも用いられるところから本来原因を表わすquiaが名詞節を導く接続詞として用いられるようになったものである。[注7]

〔jdeo〕:正しくはideoである。(III－1参照)

dejsta uita：正しくは、de ista uitaである。

〔ansiosusegamus〕：現代スペイン語に直訳するとansioso seamosである。

ansiosu：ラテン語の形容詞anxius(不安な)から出た語で、現代スペイン語では単数形ansioso、複数形ansiososである。ここでは主語が一人称複数なので、ansiososとすべきであろう。ansiosuという形は、*ansiosusという推定形の形容詞の単数対格ansiosum(ロマンス語の名詞、形容詞はラテン語の対格から来ている）の語末のmが欠落した形がそのまま用いられていると思われる。

segamus：現代スペイン語の seamos(serの接続法現在一人称複数)である。serの接続法現在の活用は、ラテン語の sedere(座る)の接続法現在(sedeam,sedeas,sedeat,sedeamus,sedeatis,sedeant)から来ている。segamus は sedeamus の変化した形である。

segamus は seyamus と発音されていたと思われる。これはgが俗ラテン語では、口蓋母音e,iの前では、yあるいはjの音価をもつようになり、それがe,i以外の母音a,o,uの前でもしばしば同じ音価で用いられるようになったことによる(注8)。

sedeamus は下線部がyodであり、audiente>oyente,radiare>rayar等と同じ変化をしている(注9)。

ansiosusegamus は前の solliciti simus を説明しており、「我々が気づかう(ためだけ)…」を意味する。

III－6 Si uero, quod Deus non patiatur〔non quieti〕et mala opera exercimus〔nos sificieremus〕et plus pro carnis luxuria quam pro salute anime laboramus, timeo ne quando boni christiani cum angelis acceperint uitam eternam nos, quod absit, precipitemur〔guec ajutuezdugu〕〔nos nonkaigamus〕 jngeenna.

しかしもし我々が、神がお許しにならない事や悪行を行い、魂の救済よりも肉欲のために意を用いるならば、私は良きキリスト者たちが天使たちと共に永遠の生命を受ける時に、そんな事にならなければ良いが、私たちは地獄に落とされるのではないかと思う。

〔non quieti〕：nonはラテン語の否定の副詞がそのままの形で用いられている。

quietusは中世ラテン語で「許された」を意味する形容詞で、non quieti(許されていない)で前のnon patiaturを説明していると思われるが、正確ではない。またなぜquietiと複数形になっているかも不明である。

exercimus：正しくは exercemus であろう。

〔nos sificieremus〕：ラテン語とスペイン語の中間的な語句で、現代スペイン語に直訳するとnosotros si hicieremosとなる。

nos：人称代名詞一人称複数主格で、ラテン語の形がそのまま用いられている。現代スペイン語のnosotros(nos＋otros)。

sificieremus：si ficieremusである。ｓｉはラテン語、スペイン語同形で、「もし～」を意味する接続詞。

ficieremusの語頭のｆは、古スペイン語においては〔h〕と発音されていた(注10)。さらに第二音節のｃｉであるが、ラテン語の「母音＋ci」は、古スペイン語ではｚｉとつづられ、〔d͡ʒi〕と発音されていたが(注11)、ここではまだラテン語のｃｉというつづりがそのまま用いられている。なお現代スペイン語のciのつづりは、1726年出版のDiccionario de Autoridadesの序文で定められたところによる(注12)。

ficieremus は時制は接続法未来で、現代スペイン語の hicieremos であるが、人称語尾－musはラテン語の形がそのまま用いられている。

nos sificieremusで文頭のＳｉと直前の exercimus を説明しており(Si～exercimus)、「もし我々が～を行うならば」の意。

anime：正しくはanimae(animaの単数属格)である。格語尾ａｅがęに縮約されている。

uitam eternam：正しくはuitam aeternamである。ęternamの第一音節のｅはａｅの縮約形であると思われる。(上列のようにａｅの縮約形であってもｅが用いられているケースもある。)第二音節のęは ultra corrección であろう。

pręcipitemur：正しくは praecipitemur である。第一音節のａｅがｅで表わされている。

〔guec ajutuezdugu〕：バスク語である。Menéndez Pidalはnosotros no nos arrojamos(私たちは飛び込まない)と解釈している(注13)。前の precipitemur を説明していると思われるが、否定があるため意味が反対になっている。

〔nos nonkaigamus〕：これもラテン語とスペイン語の中間的な語句で、現代スペイン語に直訳すると、nosotros no caigamosとなる。

nos：前述の通りである。

nonkaigamus：non kaigamusである。nonはIII－６参照。

kaigamusは現代スペイン語のcaigamos(caerの接続法現在一人称複数)である。この語はラテン語のcadere(落ちる)から来ており、kaigamusにあたる形はcadamusである。kaigamusという活用形は、直接法現在一人称単数形caigoから作られているが、caigoのgはtengo,vengoからの類推である(注14)。

kaigamusは語幹は変化しているが、人称語尾はラテン語の形がそのまま用いられている。

nos nonkaigamus で前の precipitemur を説明していると思われるが、これも否定があるため意味が反対になっている。

jngeęnna：正しくはin gehennaである。ｊに関してはIII－１参照。ｈに関してはIII－５参照。

ęは ultracorrección であろう。

III－７ Non nobis sufficit 〔non conuienet anobis〕 quod christianum nomen accepimus si opera christiana non facimus…

もし我々がキリスト者としての行いをしないならば、キリスト者の名を受けただけでは十分ではない。

〔non conuienet anobis〕

non：III－６参照。

conuienet：III－４参照。

anobis：a nobisである。nobis一語でラテン語で「我々に」(nosの与格)を意味するので前置詞ａは不要であろう。さらにこのaはad(～へ)のｄが落ちたものと思われる。

non conuienet anobisで前のnon nobis sufficitを説明しており、「我々には適当ではない」の意。

III－８ Inuidiam uelut gladium diaboli respuit 〔geitat〕...

(彼は)嫉妬を悪魔の剣の如く退ける。

主語がはっきりしない。「良きキリスト者」であろうか。

〔geitat〕: 古典ラテン語のjactat(<jactare)、現代スペイン語のecha(<echar)である。前のrespuitを説明しており、「(彼は)投げ捨てる」の意。jectare>jectare>echarという変化をたどった。

ラテン語の−ct−は、cが母音化して、−it−の過程を経て−ch−に変化して行くが、ここでは−it−の段階でとどまっている[注15]。

geitatはyeitatと発音されていたと思われる。gの音価についてはIII−5参照。

III−9 qui adulterium〔fornicatjonem〕non facit...

(彼は)姦通をしない。

この文も主語(quiの先行詞)不明である。以下主語不明の文が続く。

〔fornicatjonem〕: 正しくはfornicationemである。jについてはIII−1参照。この語はまったくのラテン語で、fornicatio(売淫)の単数対格。前のadulteriumを説明している。

III−10 qui de fructibus suis prius〔ances〕non gustat nisi ex jpsis aliquid Deo offerat,

(彼は)自分の収穫を、神にそのうちからいくらかを捧げないうちは味わわない。

〔ances〕: 前のpriusを説明していると思われる。ラテン語のanteaから出たものであろう[注16]。「より前に」の意。

jpsis: 正しくはipsisである。(III−1参照)

III−11 qui decimas annis singulis erogandas pauperibus reddet〔qui dat alosmisquinos〕,

(彼は)毎年支出の十分の一を貧者に与える。

reddet: 前後の文章から判断してredditであろう。reddet(直説法未来)とreddit(直説法現在)におけるように、活用語尾の−etと−itの混同もまたラテン語の未来形消失の原因の一つである[注17]。

〔qui dat alos misquinos〕

qui: ラテン語の関係代名詞quiがそのまま用いられている。現代スペイン語のqueは、quiの単数対格quemのmが落ちたものである。

dat: これもラテン語の形を保っており、語末のtが失われていない。dare(与える)の直説法現在三人称単数で、現代スペイン語のda(<dar)である。

alosmisquinos: a los misquinosである。「貧者に」を意味する。

aはIII−7で述べた様に、ラテン語のadのdが落ちた前置詞である。

los(男性複数定冠詞)は、ラテン語の指示詞 ille の複数対格 illos から来ており、古くは elos であった。elos の aféresis が現代スペイン語の los であるが、alosmisquinos は前置詞 a の後で aféresis がおきてい

る。前置詞が前にない場合は navarroaragonés（ナバラ・アラゴン方言）では完全形 elos が用いられていた[注18]。

Castilla では語頭の e は早くから失われた[注19]。

misquinosはアラビヤ語で「貧しい」を意味するmisquinから出た語で、語形もスペイン語化している。現代スペイン語のmezquinosである。語中の s と z の交代は他の語にも見られる[注20]。

qui dat alosmisquinosで「(彼は)貧者に与える」を意味し、qui～pauperibus reddetを説明していると思われる。

III－12 qui sacerdotibus honorem jnpendit〔tienet〕...

(彼は)司祭たちに敬意をはらう。

jnpendit：正しくはimpendit(inpendit)である。

語頭の j に関してはIII－1参照。

〔tienet〕：ラテン語のtĕnet(tenereの直説法現在三人称単数)から出た形で、現代スペイン語のtiene(<tener)である。語幹の母音eは、ĕ>ẹ>ieの規則通りの変化をしているが、語末の子音tはまだ保たれている。この語は前のjnpenditを説明しており、「(敬意を)いだく、もつ」の意であろう。

III－13 sicut〔quomodo〕...

～のように...

前後関係不明である。

〔quomodo〕：まったくのラテン語で、前のsicutを説明しており、「～のように」の意。II－12(Glosas Emilianenses研究 I)参照。

III－14 qui nullum hominem odio abet〔nonaborrescet〕,

(彼は)どんな人をも憎しみをもって扱わない。

abet：正しくはhabetである。hについてはIII－5参照。

〔nonaborrescet〕：non aborrescetである。nonはIII－6参照。aborrescetはラテン語にはない動詞で、horrescere(ラテン語で「ふるえ上がる」を意味する動詞）に接頭辞abがついた形である。しかし、語末のtや、－sce－が保たれており、語形はラテン語である。活用語尾－etは未来の三人称単数であるが、前後関係からしてIII－11で述べたように、現在形－itと混同されたものであろう。

ラテン語の－sec－の cは、口蓋化して〔ts〕と発音されるようになり(sはdisimilaciónにより消失)、古スペイン語ではçとつづられた[注21]。さらに現代スペイン語ではcとなり、〔θ〕と発音されている。現代スペイン語のaborrecer(憎む)はこのab＋horrescereから来ている。

nonaborrescetで前のodio abetを説明しており、「(彼は)憎まない」の意。

III－15 qui stateras dolosas et mensuras duplices uelut 〔quomodo〕 gladium diaboli perorrescit 〔aborrescet〕...

(彼は)インチキ天秤や不正測定を悪魔の剣の如く恐れる。

〔quomodo〕：III－13参照。

perorrescit：正しくはperhorrescit(<perhorrescere)である。hについてはIII－5参照。

〔aborrescet〕：III－14参照。前のperorrescitを説明しており、「(彼は)憎む」の意。

III－16 qui quando ad eclesiam uenerit orationi jnsistit et se diuersis 〔muitas〕 litibus non jnligat 〔non separat〕...

(彼は)教会に来れば一心に祈り、種々の争い事には加わらない…

〔jnsistit〕：正しくはinsistitである。jについてはIII－1参照。

〔muitas〕：現代スペイン語のmuchas(<mucho)で、前のdiuersisを説明しており、「多くの」の意。ラテン語の形容詞multusから来ている。ラテン語の－lt－はIII－8で述べた－ct－と同様、lが母音化して－it－の過程を経て－ch－に変化して行くが、(注22)ここでは－it－の段階で留まっている。

jnligat：正しくはinligatである。jについてはIII－1参照。

〔non separat〕：non(III－6参照)もseparatもラテン語の形がそのまま使われている。現代スペイン語に直訳すればno separaで、「(彼は)切り離さない」となり、前のnon jnligatの説明としてはほぼ反対のことを意味しており、不適当であると思われる。

III－17 adjuro 〔coniuro〕 ut totius uiribus 〔de tota fortitudine〕 jn omni causa justitia teneatis et de anime uestre salute adtentius 〔buena mientre〕 cogitetis...

私は君たちが全体で力を尽してすべての裁きにおいて正義を守り、君たちの魂の救いについてもっとよく考えることを願う。

adjuro：adjurareはラテン語で「誓う」の意であるが、ここではフランス語のadjurer(神の名において願う、切願する)に近い意味で用いられていると思われる。

〔coniuro〕：前のadjuroを説明しており、「(私は)願う」の意。現代スペイン語のconjuro(<conjurar)である。

coniuroの下線部は、iが摩音化し〔d͡ʒ〕と発音されていたと思われる(注23)。この摩擦音は無声化し〔*〕となり、さらに現代スペイン語の〔x〕へと変化して行った(注24)。

〔de tota fortitudine〕：まったくのラテン語で、「全力で」の意。前のtotius uiribusを説明している。

jn：正しくはinである。(III－1参照)

de anime uestre salute：正しくはde animae uestrae saluteである。格語尾のaeがeに縮約されている。(III－6参照)

〔buena mientre〕：現代スペイン語のbuenamenteである。前のadtentiusを説明しており、ここでは「良く」、「十分に」の意であろう。

buenaは下線部がŏ<ǫ<ueの規則的変化をしている。

mientreについてはIII－2参照。

現代スペイン語の－menteで終る副詞はもともと、この様に形容詞の女性単数形にラテン語の「心」、「精神」を表わす名詞mensの単数奪格形menteが付けられたもので、二語に分けて書かれていた。－menteに付けられる形容詞が女性単数形なのは、menteが女性名詞の単数奪格形だからである。

III－18 Nolite uos occupare〔parare uel aplecare〕ad litigandum〔demandare〕set potius〔plus maijus〕ad orandum, ut non rixando Deum offendere〔gerrare〕.

君たちは争うことではなく、むしろ祈ることに気を配りなさい。争うことで神を怒らせないように。

〔parare uel aplecare〕

parare：前のuos occupareを説明する不定詞で、「～しようとする」の意。語形はラテン語と同形で語末のeを保っている。スペイン語のpararはこの語から出ているが、「～しようとする」の意はない。

uel：ラテン語で「あるいは」を意味する接続詞。

aplecare：ラテン語のapplicareとスペイン語のaplicarの中間的不定形で、語末のeを保っている。やはり前のuos occupareを説明しており、「(ある事に)身を入れる」の意であるが、スペイン語のaplicarにこの様な意味はない。

parare uel aplecareは以上述べた様に、前のuos occupareが、「parareあるいはaplecare」の意であることを説明している。

〔demandare〕：前のad litigandumの説明として付けられた不定詞であろうが、意味が適合しない。語形はラテン語と同形で語末のeを保っている。

demandareを、おおまかに言って、ラテン語として解釈すれば「ゆだねる」であり、古スペイン語としては「願う」となり、どちらにしてもad litigandumの説明としては不適当であろう。

〔plus maijus〕

plus：ラテン語の形容詞multus(多くの)の比較級から出た語でここでは副詞であろう。ラテン語と同じ形がそのまま用いられている。「もっと」を意味するが、現代スペイン語では用いられない。フランス語のplusやイタリヤ語のpiùはこの語から出ている。

maijus：正しくはmajusである。majusはラテン語の形容詞magnus(大きい)の比較級から出た語でここでは副詞であろう。語形はラテン語と同じであると考えていいであろう。やはりここでは「もっと」の意で用いられている。スペイン語にはない語である。

maijusの語中のiであるが、ラテン語のjは母音間ではi＋jと発音されており(注25)、それをつづりにうつしたものであろう。

plusもmaijusも、それぞれ別々に前のpotiusを説明している。俗ラテン語においては、数ある比較を表わす副詞の中から、plusとmajusが用いられるようになった。(注26)

なお現代スペイン語の比較の副詞másは、ラテン語のmagisから来ている。

〔gerrare〕：ラテン語のerrareから出た不定詞で、語末のeを保っている。前のoffendere(ut＋不定詞は古典ラテン語には見られない用法である)を説明している。ラテン語のerrareにはoffendereの意味はないが、中世スペイン語においてはerrorがof ensa, agravioの意で用いられるので[注27]、このgerrareも「怒らせる」と解釈していいであろう。

gの音価についてはIII－5参照。

なおラテン語のerrareの語頭のĕにはアクセントはないが、このgerrareにおいては二重母音化している。これは語頭にアクセントのかかる活用形の影響をうけたものである[注28]。

（続く）

〔注〕

(1)Menéndez Pidal, Ramón, Manual de Gramática Histórica Española, p.183

(2)拙稿「Glosas Emilianenses研究Ⅰ」，ロマンス語研究21, p.44

(3)Menéndez Pidal,Ramón, Orígenes del Español, p.467

(4)拙稿「Glosas Silenses研究Ⅰ」，神奈川大学「人文研究」(第90集)、p.17～18

(5)拙稿「Glosas Silenses研究Ⅱ」、神奈川大学「人文研究」(第93集)、p.9～10

(6)Lapesa,Rafael,Historia de la Lengua Española,p.422

(7)Väänänen,Veikko,Introducción al Latín Vulgar,p.254～255

(8)Menéndez Pidal,Ramón,Orígenes del Español ,p.48

Macpherson,I.R.,Spanish Phonology,p.104

Alonso,Martín,Evolución Sintáctica del Español,p.78

(9)Mateos M.Agustín,Etimologías Latinas del Español,p.167

(10)拙稿「Glosas Emilianenses研究Ⅰ」ロマンス語研究21,p.48

(11)Macpherson I.R.,op.cit.,p.126

(12)Lapesa,Rafael,op.cit.,p.422

(13)Menéndez Pidal,Ramón,Orígenes del Español,p.467

(14)idem,Manual de Gramática Histórica Española,p.292

(15)idem,Orígenes del Español,p.280～283

(16)ibid.p.368

(17)Lausberg,Heinrich,Lingüística Románica Ⅱ,p.310

(18)Menéndez Pidal,Ramón,Orígenes del Español,p.332～333

(19)ibid.,p.337

idem,Manual de Gramática Histórica Española,p.261

(20)ibid.,p.198

(21)Macpherson,I.R.,op.cit.,p.126

(22)Menéndez Pidal,Ramón,Orígenes del Español,p.280～283

(23)Macpherson,I.R.,op.cit.,p.140

(24)ibid.,p.155～157

(25)松平、国原、「新ラテン文法」，p.10

(26)Menéndez Pidal,Ramón,Orígenes del Español,p.368
(27)Martín,Alonso,Diccionario Medieval Español,Tomo II,errorの項
(28)Menéndez Pidal,Ramón,Orígenes del Español,p.147

参考文献

Menéndez Pidal,Ramón,Orígenes del Español,Espasa−Calpe,Madrid,1976
Idem,Manual de Gramática Histórica Española,Espasa−Calpe,Madrid,1973
Ministerio de Educación y Ciencia,Las Glosas Emilianenses,Madrid,1977
Lapesa,Rafael,Historia de la Lengua Española,Gredos,Madrid,1980
Macpherson,I.R.,Spanish Phonology,Manchester University Press
Väänäen,Veikko,Introducción al Latín Vulgar,Gredos,Madrid,1975
Lausberg,Heinrich,Lingüística Románica I,Gredos,Madrid,1972
Idem,Lingüística Románica II,Gredos,Madrid,1973
拙稿「Glosas Silenses研究Ⅰ」神奈川大学「人文研究」(第90集)1984.12
拙稿「Glosas Silenses研究II」神奈川大学「人文研究」(第93集)1985.12
拙稿「Glosas Emilianenses研究Ⅰ」ロマンス語研究21　1988.5

辞書

Du Cange,Glossarium Mediae et Infimae Latinitatis,Forni,Bologna,1981
Corominas,Joan,Diccionario Crítico Etimológico de la Lengua Castellana,Gredos,Madrid,1974
Diccionario Ilustrado Latino−Español Español−Latino,Bibliograf,Barcelona,1974
Alonso,Martín,Diccionario Medieval Español,Universidad Pontificia de Salamanca,1986
Corripio,Fernando,Diccionario Etimológico General de la Lengua Castellana,Bruguera,Barcelona,1973
松平・国原、「新ラテン文法」、南江堂、東京
田中秀中、Lexicon Latino−Japonicum（羅和辞典），研究社、東京，１９８１
Oxford Latin Dictionary,Oxford University Press,New York,1984
Real Academia Española,Diccionario de la Lengua Española,Espasa−Calpe,Madrid,1984
Pabón,J.M.,Diccionario Manual Griego−Español,Bibliograf,Barcelona,1975